

歯科技工士⇔歯科医師 コミュニケーションアプリ  
～コミュニケーションから生まれる歯科治療の成功術～

前畑 香

歯科技工士は歯科医師にとって、歯科治療の一端を担う大きな存在である。歯科技工士と歯科医師の分業が確立された現在、歯科技工を自ら行う歯科医師は、ほとんどいなくなったと言っても過言ではない。そして義歯の演者として講演会やセミナーを行う私自身も、日常診療で歯科技工を全く行っていない歯科医師の一人である。このような現状で、歯科技工士の存在は、まさに“私の右手”である。東京の大手ラボに所属する“私の右手”である歯科技工士達は、各部署合わせて 9 人いる。歯科技工物により分業され、流れ作業を行う大手ラボの歯科技工士達と、どのようにコミュニケーションを図り、歯科診療をおこなっているのか症例を踏まえて解説する。

- ・義歯治療で重要なのは精密印象ではなく**概形印象**？
- ・コンビネーション義歯を成功させるためのポイントは**仮咬合採得**と**仮人工歯排列**？
- ・**デジタル歯科治療**だからこそ 歯科技工士⇔歯科医師 コミュニケーション！？

「金属アレルギーと歯科材料について」

垂水 良悦

演者は歯科技工士になる前に水道バルブのメーカーで鋳造作業の職についており、同僚が金属アレルギーになって部署異動になるなど、金属アレルギーを身近に感じていた。現在の職についてからも歯科技工士だけでなく、事務職で金属アレルギーの発症により退職を余儀なくされた後輩も見てきた。また、ジルコニアや CAD/CAM 冠の設計・加工の業務で目にする指示書にも、金属アレルギー患者といった注意書きを目にすることも多く、アレルギーに苦しんでいる人が多いと感じている。一度アレルギーを発症してしまうと完治することは困難であるため、予防することが最善の処置であると言える。

金属アレルギーの発症の要因は諸説あるが口腔内の歯科用金属によるものもあり、患者へ適切な補綴物を製作する立場からは使用材料への知識を深める必要がある一方、鋳造作業時の金属ヒュームの吸入などにより、歯科技工士である私たち自身が金属アレルギーにならないように注意しなければいけない。

今回、金属アレルギーが他のアレルギーと大きく違う点や検査方法の紹介、また工業大学から材料学に関わり、現在はマテリアルアドバイザーとしての立場から金属の基礎の話と、CAD/CAM システムが歯科に応用されてからのセラミックスを中心とした様々な歯科材料についても述べ、歯科技工士としての日々の作業環境の見直しと症例に応じた材料選択の一考になれば幸いである。